

1. 指導案が書けてこそ一人前

- ・指導案は年に一度か二度ぐらいしか書かない。
だからこそ心をこめて書かないといつまでも上達しない。
- ・指導案がうまく書けてくるとなると、自然に授業は上達していく。
- ・指導案がうまくかけるということは、「子ども理解」が深まっている証拠。
- ・書くことによって自分の考えが整理され、授業が見えてくるもの。

2. 指導案の中心は、「展開の部分」より「趣旨の部分」

- ・「趣旨の部分」がしっかり書けた指導案なら、授業はうまくいく
- ・「趣旨の部分」があいまいな指導案は、授業でふらついてしまう
- ・こんな子どもだから（児童観）→こんな資料をつかって（教材観）→
こんな指導をしたい（指導観）

3. 人の指導案の「趣旨の部分」の読み方のポイント （書き方のポイント）

- ①読んでみて、すーっと頭に入っていくか
- ②このクラスの子どもたちはどんな子どもたちだろうか想像できるか
- ③授業者の先生の願いや思いは、いったい何かが伝わってくるか
- ④児童観・教材観・指導観が一本の筋として通っているか
- ⑤この授業のイメージがわき、ある程度授業風景がうかんでくるか

4. よくある悪いパターン

- ・児童観・・・全体的に子どもをみて書いてあり、個々の子どもの様子がまったくみえないもの。そのまま、他のクラスにもっていっても使えるような書き方
- ・教材観・・・ただ単に、教材の説明しかしていないもの。このクラスの子どもと教材の関係が書かれていないもの
- ・指導観・・・〇〇になってほしい、～と願っている、というように「〇〇してほしい」という書き方しかされていない。このクラスの子どもの実態をふまえた指導の具体が書けていないもの

5. 「展開の部分」では、子どもの心が揺れる箇所をしっかりと書く

- ・心の揺れる箇所については、その手だてや揺さぶりの具体的指導が書かれているか
- ・焦点児がいる時は、その子にどう関わるかの具体が書いてあるか

6. 指導案は、「自分で書く」「人のものを見る」ことによって上達し、授業もうまくなる、その回数は多いほどいい。